

## エッセイ

## やじ馬昆虫撮影記

(その10 オトシブミの揺籃)

(最終回)

千葉大学大学院 准教授

野村 昌史 (のむら まさし)

帰国後、1年ぶりに日本の昆虫を観察している。道ばたの雑草や小さな緑地でも、昆虫に出会う頻度が米国と比べて格段に高いので、帰国後次々に入ってくる仕事をこなす慌ただしい毎日のなかでも、外に出るのが楽しみである。

戻ってきて、あれを見ようこれを見たいという希望がないわけではないが、まずは遠出するよりは身近な自然をやじ馬的に観察する日々を送っている。

そんな矢先、大学構内に植えられているエゴノキの葉上に、小さな黒い甲虫がいるのを見つけた。構内には何本かエゴノキがあるが、これまで見つけていなかったエゴツルクビオトシブミだった。しかも私の目の前という手頃な高さにいるメス成虫である。彼女はせわしなく葉を点検していたが、いきなりスーッと端から葉を切り始めた(図-1)。目の前で揺籃を作ってくれるようだ。しかも最後にカーブさせる独特な切り口で、想像以上に速く葉を裁断した。

いろいろ仕事が多まっているが…たぶん学生が私の帰りを待っているが…彼女のこの仕事の速さなら、少しの観察時間で揺籃作りを全部見ることができのかもしれない。そう思ってじっくり観察することにした。

裁断作業は速かったものの、その後は葉が萎れてくるのを待たなければ、次の段階へは進まない。しかしエゴノキの葉はそう厚くないので、彼女は程なく作業を開始した。主脈沿いに葉を上下に移動しながら、両脚を使って葉を二つ折りにし、そして先端部を折り込みながら揺籃の芯に当たる部分を作り上げ、その部分に穴を開けて

から向きを変えて産卵する姿を観察・撮影できたときは感激してしまった。

その後、彼女は仕上げを点検しつつ葉を巻き上げていった。そして徐々に葉を巻き上げ、最後は独特のカーブした切り口によって巻き上げた揺籃が縦位置になって完成したとき、ありきたりだが、揺籃作りを観察した人が共通して思う「どうして誰にも教わらないのに、こんな職人技の揺籃が作れるのか」という感情を持たずにいられなかった。

こうして1時間半ほどかかった揺籃作りの全行程を見届け、400枚以上の写真を撮影したところで、私を探しに来た学生たちに研究室に呼び戻されたのだった…。

その後、休日に訪れた高尾のヤブザクラに赤いオトシブミがいるのを見つけた。アカクビナガオトシブミという種類だったが、観察し始めたところ交尾直後のメスが揺籃を作り始めた。葉を裁断することなく、二つ折りにした葉を巻き上げる揺籃作りは少しワイルドであったが、その仕事ぶりはいいねいで、何度も巻き上げの状況を確認する様(図-2)は、やはり職人にふさわしい姿だった。私はオトシブミが折り曲げた葉の主脈側に位置し、横から葉を巻き上げることを知らなかったので、巻き上げる姿を初めて見るだけでも感動した。

外に出るたびに新しい出会いが、そして見慣れた昆虫でも新たな一面を見せてくれる…これからもそんな感動を求めて昆虫を観察していきたい。 [了]



図-1 葉を裁断するエゴツルクビオトシブミ



図-2 揺籃を点検するアカクビナガオトシブミ